

小山工業高等専門学校研究紀要
第四二号（二〇一〇） 一八三―一九二

森鷗外『西周伝』論

The study of Ogai Mori 『Nishi Amane-den』

村上 祐紀
Yuki MURAKAMI

一、はじめに

明治五年、父静男に伴われて上京した森鷗外は、神田小川町にあった西周邸に寄寓し、本郷壱岐殿坂にあった進文学舎に通った。周知のように、鷗外にとつて西周は故郷津和野藩の先学にあたるが、それ以上に、西家は森家の分家であり、両者は姻戚関係にあったのである。鷗外最初の妻赤松登志子との結婚の際、当時陸軍省にあつて、赤松家と閨閥をなしていた周が奔走したことも有名な話である^一。そして周の逝去後、嗣子紳六郎の依頼に基づき、鷗外は一年弱という短い歳月の中で『西周伝』（明31・11、西家蔵版）を編み上げることになる。

『西周伝』は、一読して叙述内容に偏りのあること明らかである。即ち、周の生涯から幕末維新期までの叙述が大半を占め、明治に入つてからの周の事蹟は年譜風の事柄の羅列が続く。本作品が〈全篇は単なる年譜の精密化にすぎない様な、概して無味乾燥な行文の連続〉^二と評される所以である。しかし、叙述の大半を占める幕末維新期に着目し、『西周伝』の叙述を追つていくならば、次のような疑問が生じる。作中の周は幕府に仕える身でありながら、しばしば幕府の中心から自身が疎外されていることに不満を感じている。こうした姿が随所に描かれるのは何故なのか。更に、近代の先駆けとして評価される明治期の業績^三ではなく、作中の大部分に幕臣としての姿が描かれるのは何故なのか。

本稿が掲げた『西周伝』にまつわるこのような疑問は、実生活における鷗外と周^四、あるいは伝記校閲者^五の一人である山県有朋との個人的関係を手がかりに、夙に言及されている。例えば村岡功^六は「『西周伝』を読んで、奇異に感ずることの一つに、幕末の将軍慶喜と周との関係があ

る」と述べた上で、明治新政府の陸軍に重用された周は、山県有朋への配慮からかつての〈自己の役割を、極力過少に示す必要があり〉^七、鷗外もそのことを十分承知していた^八と指摘している。

一方、大久保利謙^七は〈前半は手に「西家譜略」その他の史料があつたが、後半にはそれがなかったからという簡単な理由で、要すると西家の注文によつて急遽脱稿した結果にほかならないであろう〉と、短期間での執筆と史料不足を原因と指摘する。『西周伝』に対するかかる見方は、〈鷗外一流の一面的な見方の帰結〉^八とされるように、否定的な評価を与えることとなった。

本稿は、『西周伝』が西周の伝記であり、しかもまとまつたものとしては初めて提出されたものであるという側面に改めて注目し、同時代の「伝」の問題から作品を位置づけることを目論むものである。従来『西周伝』は、様々な観点から、作者鷗外という磁場の中で読まれてきた傾向にあるといえる。まずは『西周伝』に見られる特徴的な問題を、性急に作者の独自性に回収するのではなく、何故このような叙述が見られるのかを同時代において考える必要があるのではないだろうか。

以下、まずは同時代の伝記との比較を通して、『西周伝』がいかに伝記の形式を強固に有した作品であるかを確認し、その上で伝記としての作品の持つ意味について考察していきたい。もって最終的に、周の造型に関する先に掲げた疑問を明らかにできればと考えている。

二、「伝」のスタイル

先に述べた大久保利謙^九は『西周伝』の欠陥として、前半部に比べて明治以降を記した後半部の内容が希薄であるという叙述内容の偏りと、史料操作の二点を挙げている。『西周伝』には、鷗外が史料として用いた周の草稿が随所に引用されている。『西周伝』の「凡例」には、草稿の中に紀行や日記、書簡などが含まれることが示されているが^{一〇}、これらに引用の際、鷗外の手によって改変や抄録といった操作がなされているという事実を大久保氏は明らかにしている。

しかし、ここで注目したいのは、同時代に書かれた伝記には、ある程度定まった形式が存在するということである。生誕、先祖から語り起し、逝去に至るまでを編年体で記すという方法、また附録として肖像や年表、著書目録などが見られることなどは、定まった形式の一つである。こうした伝記の形式そのものは、近代の〈実証的伝記〉^{一一}が成立する以前より脈々と受け継がれてきた伝統であると言える。このような伝記の伝統的な形式と、『西周伝』との関連について本節では考えていきたい。まずは近代の伝記がどのように発達したのかを具体的に確認し、その上で、受け継がれてきた伝統の内実について考察を進めることとする。

『西周伝』が書かれた明治三十年代は、史学界において実証研究が確立した時期にあたり、『西周伝』はその叙述自体が根本史料に拠っているという点において〈実証的伝記〉^{一二}として認められる。こうした〈実証的伝記〉は明治二十年前後に登場しはじめるが、それ以前の伝記には厳密な史料に則ったものはほとんど見られず、江戸期の類型的な「伝」と区別のつかない、戯作風なものが多い。しかし、既に述べたように、歴史的研究方法として実証研究が確立していく中で、根本史料に基づく叙述が唱えられはじめる。そうした動きは伝記の叙述に関しても例外ではなく、中でも民友社の人物論は新たな「評伝」というスタイルを提唱し、一種の伝記ブームともいえるべき事態を巻き起こした。更にそうした中で、人物をより正確に伝えようという風潮が起り、〈実証的伝記〉が発達していく。『西周伝』はまさにこうした同時代の伝記認識の中で成立し

たものとして捉えることができる。

ではこの時期に書かれた「伝」が踏まえていたはずの伝統的な形式とはいかなるものと想定できるのか。そもそも日本における近代史学の出発点はいわゆる修史館一派、即ち重野安繹、久米邦武、星野恒らによる国史編纂に求められる。彼等は清朝考証学の影響下にあったため、国史編纂にあたっては中国正史の伝統を念頭に置いた。その一方で、ランケが築いたドイツ史学を積極的に取り入れ、実証的研究の素地を作ったのだった。しかしここで注目したいのは、彼らがランケ流の史料批判を受け入れる際に、受け入れる土壌として既に考証学が備わっていたということである。ドイツ史学の実証性を修史事業の参考とした彼らにとって、それは漢学者としての枠組みを超えるものではなかった。即ち、考証学を紹介することでドイツ史学を取り入れた、ということである^{一三}。それはむしろそのようにしか理解できなかったというべきであろう。

だとするならば、ここで「伝」の伝統といった場合、中国の人物の「伝」がどのようなものであったのかを捉えることが手がかりとなるはずである。中国文学においては、架空の人物の「伝」や実在すると信じられた理想的人物の「伝」の型が古くから受け継がれてきたとされる^{一四}。即ち、「伝」と模することで架空であつても実在するかのごとく描くなど、「伝」という字の持つ意味を積極的に用いて様々な架空の「伝」が輩出されたのである^{一五}。

これらを踏まえるならば、近代の伝記は、「伝」の示す伝統的な型を素地に、根本史料によつて「伝」を構成するという近代の歴史叙述法を取り入れることで〈実証的伝記〉^{一六}として発達していったといえる。明治初期の教養の中心が漢学であったことから、今見てきたような伝統が自然と根付いていることは言うまでもないだろう^{一七}。ここで強調したいのは、「伝」の型が深部に体得されているがゆえに、同時代の伝記それぞれが似通つてしまふという事態である。鷗外の『西周伝』もその例外ではないと考えられるのである。

そこで改めて『西周伝』を同時代の伝記と比較することで、『西周伝』の特徴がこの作品特有のものではないということを明らかにしていきたい

い。以下、『西周伝』の特徴を、成立事情、原文の改変や抄録がなされていること、叙述内容の偏りが見られることの三点から見ていくことにする。

まず、伝記の成立事情である。『西周伝』の「凡例」には、鷗外が西家との縁故により執筆を依頼され、仮印刷後、生前周と交流のあった諸氏、遺族の校閲、補正を受けた上で出版されたという事情が記されている^{一六}。ここで示されている成立事情は『西周伝』が鷗外の「頼まれ仕事」と見なされる所以でもある。しかし、こうした成立事情は『西周伝』に限らず、例えば大槻文彦『箕作麟祥君伝』（明40・11、丸善）にも認められるものである。その凡例からは、大槻が「箕作氏と、三世の通家」という縁故関係から執筆者となった経緯や、〈旧門人、朋友、同僚の諸氏〉によつて〈麟祥君の言行につきての談話批評〉など伝記の材料が提供された事が読み取れる。故人と生前付き合ひのあった人物たちの証言や訂正は、信憑性の高さを保証するものとして、伝記成立には必要不可欠なものであったのである。それは短期間の執筆により〈孟浪杜撰〉を嘆く作者が、〈唯編中ノ事実ハ悉ク知友諸人ノ親シク目睹スルモノナルヲ以テ直チニ其ノ誤謬ヲ批正セラルヘキノ便アリ。是レ余ノ少シク其懷ヲ寛ニスル所トス〉^{一七}と述べていることから窺える。ここから『西周伝』は特異な成立事情ではないといえることができる。

次に改変や抄録についてであるが、これも他の伝記に類似したものである。史料操作はそもそも中国の正史に見られたもので、内藤湖南^{一八}によると〈原文をいくらか書き改めるやり方は、范曄の後漢書から始まる〉という。その理由を〈一つは材料が時代とともに増加するに拘らず、それを歴史に編纂する時に、従前の歴史と大差のない分量にしようとするために、自然に簡単に省略する必要を生じた〉と説明している。作者による改変や抄録は、主観による操作としてではなく、むしろ事物を公正なものとして伝えていくという立場を補強するものであったと捉えるべきである。

作中には、〈周が当時の懷抱を見るに足るが故に、こゝに妙出す〉など、いくつかある史料の中から意識的に選択された根拠が随所に付され

ている。これは例えば、勝田孫弥『西郷隆盛伝』（明28・3、勝田孫弥）にも見え、〈此日記に依りて観れば当時切迫の事情を想知すべし〉と、当時の状況を〈想知〉するという史料引用のもたらす効果について言及している。史料は〈見るに足るが故に、こゝに妙出〉されたものであり、改変は正確な人物把握のために必要とされたのだといえる。正確な人物把握という目的の延長にあるのは、伝記が後世にその人物を伝える役割を担っているという認識である。村田峰次郎『大村益次郎先生伝』（明25・12、稲垣常三郎）には、〈大村先生ハ愧奇特偉清高絶歴の君子〉であり、〈今其の伝を立つるものハ実に後生をして奮然学ぶ所あらしめんかためなり〉と、後に伝えていくという意識が明確に表れている。

こうした立場から、三点目の叙述内容の偏りもまた伝記の方法の一つとして認められる。例えば、内容の偏りが特に顕著に見られるのは〈先生ノ教育事業〉に焦点を当てた木村匡『森先生伝』（明32・9、金港堂）である。〈此書ハ森先生生涯ヲ通シテノ重要ナル事蹟ヲ網羅シ、特ニ先生ノ教育事業ハ其本領ナルヲ以テ詳説スルヲ勉メ〉と冒頭で宣言する通り、本伝の半分以上を森有礼の〈文部省時代〉が占めている。人生全体を均等に描くのではなく、作者が重要だと判断した一側面について詳細に描くことで、森有礼の〈重要ナル事蹟〉が語り伝えられていく効果を期待しているのである。ここから『西周伝』の叙述内容の偏りは、不均衡ではなく、何を重視して描いたのかという観点から考え直すべきであると思われる。

同時代の伝記の描写方法は、どのようにして後世に遺し伝えるかという目的に則つて採択されていると考えられる。同時代を参照することで、『西周伝』はこうした伝記概念を踏襲した上で描かれたものであるということが明白となる。『西周伝』は後の時代からは欠陥のある作品であったとしても、少なくとも同時代においてはより正確に伝えるために選択された叙述方法に基づいていたはずである。

その上で注目したいのは、周の生涯の中でも重点的に描かれる幕末維新の数年間である。その分量から、鷗外が周の伝記を描くに当たつてこの時代を重視したと考えることができる。そこに描かれる周の造型は、

同時代の中でどのような意味を含意するのであろうか。

三、西周の見た幕末維新

『西周伝』の幕末維新期の叙述には、幕臣としての西周が描かれている。しかしその叙述を追っていくと、幕府の任用が周にとって不本意なものであったということが随所に示されていることが分かる。例えば、周の任用は「電気灯の雛形を試み、繡縫機の文庫を讀ましめ玉ひし」というものであり、「西洋の事といへば、余等をしてこれに当らしめ」るという、国政に関わることは程遠いものであった。

そもそも『西周伝』には、周が脱藩を決意した青年期から、「余にして今より後身を立て道を行はんと欲せば、西学竟に闕くべからず」と洋学に対する関心が示されている。それは洋学を習得することによって、国政に関わるような有能な人材になり得ると信じているためである。『西周伝』には、国政に預かるという周の強い希望が繰り返し描かれている。周の手による海外留学の建白書に見える、次のような言葉を引用していることはその一例である。

いにしへ遣唐使の事ありし時、兼ねて留学生をも置かれし例など引き、彼国に往きてその政治の学など伝へ得たる人を得て、左右の顧問に備へられなば、事の体を得べしなど

ここで周は遣唐使の例を引き、それに自身をなぞらえている。こうした主張からは、海外の「政治の学」などを得ることによって国政に預かるという意欲が窺える。国政に預かるという願望が当初からあったからこそ、「西洋の事といへば、余等をしてこれに当らしめ」る扱いに対して、不満を覚えざるを得なかったのである。次の引用には、「何の故に召されたるを知らず」という周の心中が赤裸々に語られている。

抑々行彦と余とは和蘭より帰り、幾くもなくして今の將軍に火急召致せらる。世間或は視て諮問国政の事に及ぶとなすならん。然れども絶て此の如き事なく、余等二人は終にその何の故に召されたるを知らず。窃に謂へらく。將軍の学士を參ふは、これを用ゐるに意あ

るに非ず。猶古の人主が龍を好めるところとなるか。澆季動もすれば此弊あるなりと。

また、繁盛する私塾の業に対して、「大計秘謀」に関わることなく奥詰医師としての任務を日々こなしていく周の様子が次の引用に描かれている。

然れども私塾の業愈盛にして、幕府の職愈間に、国家事多くして、周日ごとに奥詰医師の輩と雑話し、大計秘謀一も与り聞くことなし。周快々として樂まず、放飲自ら遣る。

このように、作中には、周が時勢の中心から取り残されていく様子や、自身の任用に対する不満が随所に語られている。こうした周の立場には、幕末維新という時代の中での一つの立ち位置が示されている。周は、幕臣として国政に預けられないまま、激動の時代が過ぎていくのを周囲の状況から把握していくという立ち位置に置かれているのである。そして『西周伝』の歴史はこうした立ち位置から発信されたものといえる。

『西周伝』には周とその周辺の状況が描かれており、とりわけ幕末維新期の叙述には、周が幕臣であるが故に、幕府と徳川慶喜周辺の歴史が描かれている。慶応二年、慶喜に召集されて京都に行った周は、奥詰医師として幕末維新の状況を目撃することになる。それは決して自身の希望したような登用ではなかったが、慶応三年十月から明治元年四月にかけて大阪、江戸、水戸へと退いていく慶喜に従っていくという任務を負った。こうした任務を与えられた周の動向やその当時の心境を明らかにすることが、同時に維新前後の状況の一端を示すことにつながる。本稿では、こうした周の立ち位置に注目し、『西周伝』を幕府とりわけ慶喜周辺を描いた維新史として捉えたいのである。

例えば、次の引用には「二条城」が「戒厳」したという、まさに徳川勢が戦闘態勢を取った瞬間の状況が描かれている。そして「干戈の興ること瞬間に在らん」とされている。維新史の一幕といった叙述である。

家僕来りて、二条城戒厳すと告ぐ。(中略)直ちに歸りて登城す。至れば則ち新撰組の兵ありて守れり。故を問へば曰く。薩摩の兵禁闕を擁せり。干戈の興ること瞬間に在らんと。周留まりて城に居る。

更に重要なのは、『西周伝』は西周が見た維新史であり、西周の目を通して幕末維新の叙述が描かれているということである。例えば次に示す慶喜の大阪城逃走の場面には、そのことが如実に表れている。鳥羽伏見の敗戦を受けての徳川慶喜の大阪城逃走は、作中では次のように描かれる。

二人御用部屋に入りて、將に復命する所あらんとす。人々面色土の如く、所々に偶語して顧みず。周乃ち鉦太郎に何の故ぞと問ふ。鉦太郎拇を豎て、曰く、此物夜通ると。周大に驚く。(中略)是に於て衆相目して後事を議す。

この場面からは、周が突如慶喜逃走を知るに至るまでの過程と、残された幕臣たちの〈後事を議す〉様子が見て取れる。大阪城に戻った周は、詳細が分からないまま、ただ慶喜逃走の事実だけが伝えられる。こうした大阪城内の様子は、周の眼を通したものである。また反対に、すべての事柄が周の目を通して描かれているのだとすれば、周の見ていない事実は作中には当然描かれないことになる。例えば、慶喜の謹慎する水戸から江戸に戻った周は上野で彰義隊と官軍との戦を目撃する。そのことは作中に〈五月十四日夜窓外剣戟の音を聞く。死傷あり。邸内の人云ふ。官兵党人を逮捕するなりと〉とある。その一方で、この間に起こったはずの江戸城無血開城、奥羽越列藩同盟成立などの歴史的事件には触れられず、作中では突如周が目撃した上野戦争勃発に至るのである。

このように維新史という観点から『西周伝』を考えた場合、注目されるのは作中の大政奉還の叙述である。詳しく見ていくように、この叙述は後の歴史解釈そのものに変化を与えたものであり、『西周伝』の叙述が同時代にもたらした影響という点においても重要であると考えられる。『西周伝』の大政奉還の叙述からは、一人物の伝記が従来の歴史に一石を投じる可能性を見ることができるのである。大政奉還は作中では次のように描かれている。

十月十三日遽に周を二条の城の大広間に召さる。至れば則ち慶喜上段の間の鵜居際に坐し、一士人ありて蒲伏接近して事を言ふを見る。(中略)周始めてその薩摩の士小松帶刀なりしを知る。蓋し慶喜政

権を還す事此時を以て決したるなり。薄暮又召さる。至れば則ち大広間の廊下に障子屏風を環らし、慶喜其中に坐して周を延き、国家三権の分別及英吉利議院の制度等を問はる。即ち略々梗概を陳べて退き、其詳なることをば、燈下に手記し、西洋官制略考と題して、翌旦これを上りぬ。

ここでは慶喜が〈政権を還す事〉を〈決したる〉日の夕方に、周を召して〈国家三権の分別及英吉利議院の制度等〉を問うたこと、それに応じて周が〈西洋官制略考〉を提出したことが記されている。また別の箇所では、慶喜が江戸に戻った後も津田真道と共に〈周に命じて立憲政体の事を調査〉させていたことが示され、同じく加藤弘之、鵜殿団次郎の二人も〈目附を拝し、周等と同じく調査〉に加わったことが説明されている。それは、大政奉還の後、慶喜が恭順の姿勢を示している最中になされたものであった。

このように『西周伝』には、幕臣として周の果たした役割が述べられているが、そもそもこうした役割は、『西周伝』以前には知られておらず、『西周伝』の叙述によって公になった事柄である。そしてこの事実が明らかになったことで、慶喜が大政奉還後、新たな統一政権を議論していたという歴史解釈が可能となった。事実、ここで示された〈西洋官制略考〉は関心を呼び起こし、大正五年「江戸」誌上に〈西洋官制略考〉とおぼしき文章が「議題草案」と題して掲載された^{一九}。その内容から慶喜を「大君」とする国家構想の存在が明らかにになり、『西周伝』の叙述の信憑性を裏付けることとなった。これにより大政奉還は新しい統一政権実現を睨んでのものであったということが現在まで言及されている^{二〇}。

『西周伝』は周という一人物に焦点を当てたことにより、結果として周の関与していた幕府の内実を明らかにしているのである。

それでは、維新史としての『西周伝』の叙述は同時代の中でどのようなものとして位置づけられるのだろうか。

『西周伝』の執筆された前後は、徳川慶喜を維新の功労者として名誉回復させるといふ動きが見られる時期にあたる。明治二十一年六月、正二位から従一位へ陞叙したことを端緒に、明治三十一年三月には侯爵徳

川家達とともに参内、明治三十五年六月には公爵となる。明治三十一年の参内は、〈慶喜の参内拝謁は、蓋し維新後初てのことなり〉^{二二}といわれるように、慶喜の名誉は急速に回復し、最終的には勲一等を授けられる^{二三}。

こうした慶喜の名誉回復に先立つて、幕府再評価の動きが活発になっていたことは見逃せない事象であると思われる。明治二十二年、江戸会が結成されたのを皮切りに、幕府を再評価する動きが相次いで起こり、活動を続けていたのが明治二十年から三十年代にかけてである^{二四}。明治二十二年八月に刊行された江戸会の機関紙「江戸会誌」には設立の趣旨が述べられているが、そこでは徳川家の膨大な文化蓄積を〈三百年間の泰平を致したる原因〉として評価する一方で、〈今の理に泥みて情を軽んじ、古習旧慣を措きて唯だ法を外国より採り来りて、以て国家を経緯せんと欲する〉^{二五}明治政府の姿勢への批判が見られる。こうした発言の背景には、例えば〈然れども其書や皆明治維新の偉業を叙述するを主とし幕府の事は之を客位に置き否々寧ろ之を敵位に置いて筆を下せるを以て明治維新史と云ふべきも幕府衰亡史とは云ふ可からざるなり〉^{二六}というように、それまでの維新史が明治政府の手によって書かれた一面的なものであるという思いがあった。旧幕臣の描く維新史は、歴史の影に封印されてきた幕府の有様を正確に描くことで幕府の再評価を目論むものである。そこには、それぞれの幕府に対する懐旧や雪冤の感情が込められているのである。幕府の史実を明らかにしようという動きと、幕末維新时期の人物伝を描くことは無関係ではない。事実、明治二十年代を境に、幕末維新时期の人物伝は多く輩出されているのである。

西周を描くことで同時に幕府の歴史を描く『西周伝』は、このような幕府再評価の動向とどのような関係にあると捉えたらよいのだろうか。ここで更に同時代の流れを追ってみたい。

雪冤や再評価のために起こった動きは、その戦略として勤王心の篤さを強調していく。その結果、慶喜の名誉回復がそもそも国家の功労者という文脈の中で捉えられていったように、最終的に明治国家の言説へと回収されていくことになる。幕府側であっても勤王の立場であることに

変わりはなく、その限りににおいて国家の功労者であるという論理である。例えば、旧幕臣である戸川残花は慶喜の恭順を〈勤王〉という観点から、次のように捉えている。

公は日本国を薩長等の藩臣の手に托したり、公は日本国を幼冲の天皇に返還し奉れり、公は日本国を三百の諸侯の殿様に渡せり、公は仏国公使等が甘言に従がはず、公は三河気風の誠忠無二の旗下を棄てたり、沈思すれば前途茫々として日本国の命運は容易に判ず可からざりき、去れども公は日本国をして勤王の大義の名に由りて朝廷に還し奉り、日本国をして志士即国民の声を聞きて他の諸侯に渡し了りぬ、公の恭順は勤王の大義と国民の声とに由りて一大勇断を行ひしなりき。^{二六}

明治政府による一面的な歴史に抗して立ち上げられた幕府再評価の動きは、名誉回復に重点を置くことで、次第に恣意的なものとなっていく。本来の目的は、〈歴史は兎角一方に偏し候様にては真正の事実を見出し兼敵たると味方たるとを問はず双方の資料を取集め候て公平に研究不致候ては真正の事蹟を得兼候事と奉存候〉^{二七}と、史実を公平に明らかにすることにあった。しかし、そうした立場を掲げる一方でその恣意性が顕著になったのが、例えば慶喜の授爵前後であったといつてよいだろう。

『西周伝』に描かれる慶喜の周辺は、今見てきたような勤王心と先見性にあふれたものではない。既に述べたように、作中には周の幕府に対する不満が随所に描かれている。幕府任用は〈龍を好めるごとくなる〉ものと周自身が感じているように、西洋の言語や風俗を聞く程度のものであった。作中の〈雲間時に片鱗を見る〉という語は周が幕府の情勢を片隅からしか窺わざるを得なかった様子を如実に表現している。

更にいえば、周の目を通すことで、逆に幕府の無能さが浮き彫りになっていくという叙述も見られる。慶喜の着目した〈立憲君主制度〉も〈能く此書を解するもの〉は幕府には〈数輩あるのみ〉で、結局実現には至らなかった。幕府内の人材の乏しさを、作中の周は何度も嘆いている。

こうした周の嘆きは幕府の脆弱さをも露呈している。また、当時幕府の危機を痛感していた識人は、当然ながら周一人だけではない。作中では

その一人として寺島宗則の周宛書簡が引用されている。(今の急務は復た外患に在らずして、却りて内憂に在り)と述べられており、二度の渡欧という自身の経験から幕府の危機的状況を指摘している。『西周伝』においては、周の目を通した幕府の内実を描くことが、同時になぜ幕府は崩壊したのかという洞察となつてゐる。即ち、『西周伝』における周の視線は、単に幕府を再評価するという枠組みには収まらないものを有しているのである。

それは周が(徳川氏の世臣)ではなく慶喜に抱えられた者の一人であるという立場にも関わつていよう。(徳川氏の世臣)ではないが、一度(徳川氏の官職)を受けた者が(朝臣)として仕えるのは憚られるという葛藤は、この当時の周の立場を物語つてゐる。

周以為へらく。予固より徳川氏の世臣に非ず。前將軍に駿府に随はん^とと欲すと雖、得べからず。予又一たび徳川氏の官職を受く。何ぞ遽に榮を干め禄を求めて、彼西藩戦勝の士と伍せんや。然らば去りて故郷に帰らんか。

周のこうした立場は、旧幕臣が幕府を語るといふ方法とは自ずと異なつてくるのはいうまでもないだろう。

『西周伝』には徹底して個人の目を通した歴史が描かれている。こうした叙述が可能なのは、『西周伝』が伝記という、人物を通すことによつて歴史を描くという方法を採用しているためである。そのため既に述べたように、作中には描かれない史実もある。しかしそうした叙述が、周の見た幕末維新なのである。従つて、(大計秘謀)を知らされないことに疎外を感じ、自身の任用に対して常に不満を漏らす、そうした周の姿をそのまま描くということにこそ意味があるのである。周という人物を通すことによって、周が見たままの幕府の状況を描く。こうした描写方法を選択することは、そのまま従来の歴史の恣意性を照らし出すことにもなるのではないか。『西周伝』を同時代に置いてみた時、そうした歴史叙述の恣意性を照らし出すテクストとして位置づけることができるのである。

四、おわりに―伝記を書く鷗外

特定の人物を描く伝記がその時代を明らかにすることにつながるという認識は、例えば島田三郎^{三八}が(歴史は社会の伝記にして伝記は個人の歴史なり。二者の範囲大小相異なりと雖其性質全く相同くして共に記実を主とするに至りては則ち一なり)というように、同時代に共有されたものであつたといえる。

そもそも「伝」は、『史記』の列伝が創始とされる。以後、中国の正史には『史記』の紀伝体が踏襲され、列伝が置かれてきた。列伝がどのようなものとして捉えられていたかは、内藤湖南の次のような言説から窺うことができる。

史記は列伝といふものを書き、後世皆之に倣つたが、史記の列伝は単に一個人の爲めにその事蹟を伝へるのみのものではなく、その中には、その時代の事情を明かにすることを得るやうな書き方をしてゐる。貨殖伝とか儒林伝・遊俠伝を見ても、金持個人、学者個人の爲めに伝を書くのではなく、それが社会に如何なる関係があつたかを示す主意である。^{二九}

『史記』の列伝は(その時代の事情を明かにすることを得る)ために書かれたものであつたという。こうした内藤の理解は、史評書として最も早い時期に書かれた『史通』^{三〇}の影響を受けている。中でも注目されるのは(本紀列伝は史記漢書に起原し、その内容を一言に尽せば本紀は編年、列伝は列事である。編年は帝王の事蹟を歳月を逐うて叙述すること春秋の経文のごとく、列事は人臣の行状をその経緯について叙述すること春秋の伝文のごとくで、春秋が伝を以て経の解釈をするように、史記漢書は列伝で本紀を補ひ説明するものである。)と、劉知幾が本紀と列伝の間に明確な区別と役割分担を設けていることである。ここで述べられるように、「伝」にはもともと経文や詩書の注釈書という意味があり、それを踏まえた上で、劉知幾は本紀には歴史の大綱を示し、列伝にはその詳細を叙述すべしという原則を確立した。この歴史叙述の体例は宋代以降の歴史家たちに継承され、内藤をはじめ日本の史学界に

も影響を及ぼしたのである。

ここから、伝記はもともと正史に欠かせないものであり、国の歴史を描く一つの形態であつたと考えることができる。鷗外がこのことを充分に認識した上で伝記を執筆していることは、『西周伝』が一つの時代史として読めることから明らかである。『西周伝』は周の生涯を描くことによって、結果として周の生きた同時代史となっている。近代の黎明期に開化を推進する役割を担った西周を描くことは、近代国家の成り立ちを検証することでもある。『西周伝』において、周の人生を描くことと幕末維新の歴史を辿ることとは平行した作業なのである。

このように『西周伝』は、歴史を書く行為そのものの新たな可能性を探る試みになっていると捉えることができる。ここで言及しておきたいのは、こうした『西周伝』の試みを経て、さらに鷗外が伝記を書き続けていくことの意味である。周知のように、大正期になると鷗外は『渋江抽斎』（『東京日日新聞』大5・1/13〜5/20、『大阪毎日新聞』大5・1/13〜5/17）をはじめとする史伝に精力的に取り組みはじめる。そして生み出された史伝の形式は、高い評価が与えられてきた。しかし、鷗外は史伝執筆中においても「只新聞紙に人の伝記をかいてゐるだけ」三と述べており、史伝の形式のみを特権的に扱うことには疑問が残る三。

ここで問題になるのは、鷗外が人物に拘り続けたことにあるといえないだろうか。伝記であろうと史伝であろうと、人物を描いたという点において変わりはない。なぜ鷗外は人物の伝記を書き続けていったのだろうか。当然、明治三十一年に執筆された『西周伝』と、時期も発表形態も異なる後年の史伝を同様に論じるわけにはいかない三四。しかし、『西周伝』から一つの時代史として描く試みを明らかにすることによって、伝記を直接的に歴史に関わっていく試みとして捉えていたのではないかという可能性が浮かび上がる。だからこそ鷗外は、更に旺盛に伝記を書き続けていくのではないか。かかる意味において、『西周伝』は鷗外が伝記に関わり続けていくその契機を伺うことのできる作品として位置づけることができるのである。

注

一 中井義幸「鷗外の学生時代について」（『講座森鷗外第一巻 鷗外の人と周辺』平9・5、新曜社）参照。

二 小堀桂一郎「森鷗外と山縣有朋―明治の終焉まで―」（『明星大学研究紀要』日本文化学部・言語文化学科）6、平10・3。

三 西周の著作集である、土居光華批評・萱生奉三編次『偶評西先生論集全』（明13・4、勉成社）には、巻頭に土居光華の序文が掲げられており、「曰ク、日本学士惟西先生ノミ、西洋学士ノ風アリ、精神アリ、亦西洋学士ニ恥チサルナリト」と西洋学者としての業績を評価している。

四 清田文武「鷗外における西周」（『鷗外文芸の研究 青年期篇』平3・10）は、〈西周との関係の叙述には、微妙にあるこだわりのようなものを感じさせ、複雑な心を覗かせているところが認められる〉と指摘している。

五 『西周伝』は完成の一年前に、『西周伝未定稿』（明30・11）として関係諸氏に配布された。「凡例」には校閲、補正を頼んだ人物として山県有朋、勝安芳、福羽美静など生前周と親交のあった人々の名が挙げられている。

六 村岡功『森鷗外、自我と自尊心』（平13・10、私家版）

七 大久保利謙「解説」（『西周全集 第三巻』昭41・10、宗高書房）

八 連沼啓介『西周に於ける哲学の成立』（昭62・7、有斐閣）

九 注七、大久保利謙「解説」

一〇 〈此書主として材を甘藤斎先生手記の系譜、日記及紀行に采る〉とあり、以下書目が並べられている。

二 大久保利謙「明治時代における伝記の発達―日本伝記史の一齣―」（『大久保利謙歴史著作集7 日本近代史学の成立』昭63・10、吉川弘文館）参照。

三 永原慶二『20世紀日本の歴史学』（平15・3、吉川弘文館）、大久保利謙「日本歴史の歴史」（前掲、『大久保利謙歴史著作集7 日本近代史学の成立』）など参照。

二三 川合康三『中国の自伝文学』（平8・1、創文社）。川合は陶淵明「五柳先生伝」を先行する人物伝の型が合流する形で成立した「伝」として捉えている。

一四 例えは韓愈「毛穎伝」は筆を人に擬して伝を立てている。

一五 とりわけ鷗外においては説明を要さないであろうが、中国の文章作法書である『文章軌範』（東京大学総合図書館鷗外文庫蔵本は、宮脇通赫輯補『点註続文章軌範』明10・6、山中市兵衛）や『唐宋八家文』（鷗外文庫蔵本は沈徳潜評點『唐宋八家文読本』明12・9、磯部屋太郎兵衛）を読んでいたと思われることには触れておきたい。

一六 『西周伝』は『西周伝未定稿』と比べ、新史料（松岡隣氏に寄せられし手書二十通）などや証言が新たに追加され、全体的に分量が増えている。また、日時や役職の訂正などがなされ、全体として『西周伝未定稿』より詳しくなっていると言える。その一方で大幅な削除部分も見受けられる。顕著なのは幼少時の西家の貧窮状況を描いた部分であり、主に遺族等の訂正を受けてのものと思われる。

一七 坂崎斌（紫瀾）『陸奥宗光』（明31・6、博文館）

一八 内藤湖南『支那史学史』（昭24・4、弘文堂）。大正三年から十四年にかけて京都大学で行われた講義をもとにしたもの。引用は『支那史学史I』（東洋文庫⁵⁵、平4・11、平凡社）による。

一九 「議題草案」（「江戸」8・9、大5・1・2）

二〇 例えは、田中彰『開国と倒幕』（平4・8、集英社）には、〈西の案〉を〈当時の幕府首脳の発想をも反映したものと考えてよい〉とした上で、〈明らかに慶喜は、きたるべき新しい統一政権の掌握を考えていたとみるべきである〉と指摘している。

二一 『明治天皇紀 第九』（昭48・12、吉川弘文館）

二三 田中彰『明治維新観の研究』（昭60・3、北海道大学図書刊行会）、上野秀治「徳川慶喜の授爵について」（「皇學館大学史料編纂所報」146、平8・12）、山崎千歳「明治期における徳川慶喜の待遇」（「史友」30、平10・3）など参照。

二三 例えは戸川残花は幕府の史実を明らかにする目的の下、雑誌「旧幕

府」（明34・4）を刊行している。

二四 「江戸会誌の首に」（「江戸会誌」1・1、明22・8）

二五 福地源一郎「幕府衰亡論」（明25・12、民友社）

二六 戸川残花「前將軍徳川慶喜と薩長内閣」（「太陽」4・10、明31・5）

二七 外崎覚「旧幕府」編纂に関する愚存」（「旧幕府」2・10、明31・10）

二八 島田三郎「開国始末 井伊大老伝」（明21・3、興論社）

二九 注一八、内藤湖南『支那史学史』

三〇 唐、劉知幾撰。8世紀初頭成立。

三一 引用は増井経夫訳『史通』（昭56・10、研文出版）

三二 「観潮楼閑話」（「帝国文学」大6・10・7・1）

三三 大石直記「森鷗外の二〇世紀、あるいは、美的モデルネー『渋江抽斎』の位置づけへ向けて」（『共同研究 文学・芸術の二〇世紀―その

〈起源〉と〈変容〉―』平13・2、共立女子大学総合文化研究所神田分室）は、史伝という語について〈広く世に流通しているにもかかわらず、チームとしての明確な概念規定が何らなされてはいない〉と指摘している。

三四 目野由希『明治三十一年から始まる『鷗外史伝』』（平15・2、溪水社）は、『西周伝』を史伝の萌芽と捉え、類似する特徴として〈エピソードの集積、多様な文体、親族・姻戚・師弟などの関係の表示の重視〉の三点を挙げている。

〔付記〕『西周伝』本文は『鷗外歴史文学集 第一巻』（平13・1、岩波書店）により、必要に応じて初出を参照した。なお旧字は適宜新字に改めた。但し人名に関してはこの限りでない。引用文中の傍線は稿者による。

小山工業高等専門学校 非常勤講師

mrkmykskhk@yahoo.co.jp

〔受理年月日 二〇〇九年九月二十九日〕

